





第1章

薩南諸島

その過去・現在・未来

植村 哲
(鹿児島県離島振興課)

青山 亨
(鹿児島大学多島圏研究センター)

この本の題名は薩南諸島と名付けられている。まず、薩南諸島の範囲を明らかにしておこう。九州の南端である大隈半島から台湾にかけて、南西の方向に連なる島々を南西諸島と名づけている。これは西側の東シナ海と東側の太平洋の境にもなっている。そのうち沖縄県に属する南半分を琉球諸島、鹿児島県に属する北半分を薩南諸島と呼んでいる。薩南諸島とは文字どおり薩摩の南にある島々という意味である。

薩摩という名前は、8世紀前後に地名として記録に登場する。九州の南端の西側、現在の鹿児島県の西半分にあたる。12世紀末に島津氏が大隅、日向とあわせて薩摩を支配するようになって、ほぼ現在の鹿児島県に相当する薩摩藩ができた。九州の南端という地理的な条件のおかげで、薩摩は古来から海外との玄関口として様々な文物が出入りしてきた。日本では、中南米原産のサツマイモに薩摩の名が付いているし、海外では、朝鮮半島から連れて来られた陶工たちが作り上げた薩摩焼きが有名である。

日本では聞き慣れないが、サツマという名前は温州ミカンの英語

名 Satsumaとして海外では知られている。確かに、種が少なく甘味が強く、しかも皮が柔らかく手でむける温州ミカンは他の柑橘類にはない長所を持っている。鹿児島県の長島が原産地だったが、19世紀後半にアメリカへ苗木が輸出されたとき、薩摩からもたらされた柑橘類だということでサツマと呼ばれたのである。

日本は北海道、本州、四国、九州という大型の島に加えて5,000近くの島々から成り立っている。そのうち240の島が鹿児島県にある。この数は日本の都道府県としては五番目で、鹿児島県は全国でも有数の島嶼県ということが出来る。鹿児島県の島々には、天草諸島の一部、甑島列島、薩南諸島などがあるが、なかでも薩南諸島は、琉球諸島とともに沖縄を経て台湾へとつながる一続きの島々の一部をなしており、古くから太平洋あるいはアジア大陸と日本を結ぶ「海上の道」としての役割を果たしてきた。たしかに、薩南諸島は海によって本土とも近隣の島々とも隔てられている上に、関東や関西といった日本の政治や経済の中心地から裏返しとして、海を通じて直接、外

の世界へとつながっていたわけである。

薩南諸島は通例、大隅諸島、トカラ（吐噶喇）列島、奄美諸島の三つの群島に分けられる。その中に全部で21の有人島があるが、本書では、このうち七つの代表的な島と小さな島々の集まりからなる

二つの村を取りあげて紹介していきたい。具体的には、大隅諸島に属する、黒島などからなる三島村、種子島、屋久島、次に、トカラ列島に属する、中之島を中心とする十島村、そして、奄美諸島に属する奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島である。

特色

薩南諸島は、北緯27度から30度の間に位置している。このため、7月から9月にかけては、南から訪れる台風による被害をしばしば受ける。しかし、このように、南に位置していることと、台湾から東シナ海を北上してきた暖かい黒潮が奄美諸島と大隅諸島の間を抜けて太平洋へと流れていることのおかげで、この地域は、亜熱帯性の温暖な気候にも恵まれてきた。薩南諸島を南へ下がって行くほど亜熱帯的な動植物がたくさん見られる。島々を取り巻くサンゴ礁や海岸に密生するマングローブは観光案内でも馴染みの深い風景であるし、サトウキビは代表的な栽培作物の一つとなって

いる。屋久島と奄美大島の間を境として土着の動植物の種類が大きく変わることが分かっており、発見者の名前をとって渡瀬線と呼ばれている。

薩南諸島の社会も独自の文化を育んできた。高倉という高床式の独特の建築の存在は、薩南諸島の文化と南方の文化との強い関係がうかがわせる。なかでも、奄美諸島の文化は琉球諸島の文化と強いつながりを持っている。事実、トカラ列島以北の方言が日本の本土の方言に近いのに対して、奄美方言は、沖縄方言などにも琉球語に属する。このように、文化的には琉球諸島と近かった奄美諸島が、薩南諸島の一部として琉球諸島から分けられるようになったのは、この後で述べるように、歴史的な変遷があったからである。

歴史

海は、島々を隔てている一方で、外の世界と結びつける通路ともなる。薩南諸島はその地理的な位置のおかげで、先史時代から、隣接する琉球諸島と、さらには海外との深い結びつきをもってきた。ここで、歴史時代にはいつてからの薩南諸島の歩みを振り返ってみよう。

薩南諸島が日本の西の文明国である中国との交通に使われたことは言うまでもない。7世紀から9世紀にかけて、日本は、先進国であった中国の唐の文化を学ぶために、唐の宮廷に遣唐使と呼ばれる公式の使節を十数回も送っていた。この遣唐使が中国へ渡るときに通った航路は時代によって変わるが、そのうちの一つが南島路と呼ばれるものである。これは、薩南諸島の島々に沿って南下していき、揚子江の河口を目指すものであった。日本の仏教制度の確立に大きな貢献をした中国僧鑑真は、日本に渡ろうと辛苦の末、753年に九州の南岸に上陸したが、その彼が通った航路も南島路であった。

日本とヨーロッパとの結びつきにも薩南諸島は大事な役目を果たした。16世紀中頃になって2名のポルトガル人を乗せた中国船が種子島に到来した。日本人とヨーロッパ人との最初の出会である。日本側の史料によると1543年のこととされている。この時、ポルトガル人が伝えた火縄銃は日本の鍛冶師によって模造され、「種子島」の名で日本中に広まり、当時の戦術を大きく変えた。この後、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが日本にやってきて、キリスト教の布教に努めたが、日本を去って中国へ向かう途中で、種子島に立ち寄っている。

ところで、15世紀になると薩南諸島の南では大きな変化が起こっていた。それは、琉球王国の統一である。それまで琉球諸島には三つの小王国が並び立って互いに争っていたが、その中の中山王国の尚氏が他の2国を併合して琉球王国をうち立てた。琉球王国はさらに勢力を北に伸ばし、奄美諸島もその勢力圏に収めた。奄美諸島に琉球王国の文化が強い影響を及ぼしているのはこのためである。琉球王国は日本や東南アジアから集めた物産を中国の明

国と交易することで大いに繁栄した。薩摩藩もまた初めは琉球王国と対等な関係で交易をおこなったのである。しかし、この友好的な関係は長くは続かなかつた。明国との交易で得られる利益を手中におさめるため、1609年、江戸の徳川幕府の同意を得たうえで、薩摩藩は琉球王国を侵略した。さらに、侵攻作戦の途中で、奄美諸島の島々をも征服し、薩摩藩の直轄領とした。与論島以北の島が薩南諸島として琉球諸島から分けられるようになったのは、この時からのことである。

薩南諸島が島津藩の領土になったことに関連して、島の住民の生活を大きく変えるものが17世紀に到来した。それはサトウキビである。1610年に、福建省に漂着した奄美大島の住民が密かに苗木を持ち帰ったのが、奄美大島におけるサトウキビ栽培の始まりとされている。19世紀になると、サトウキビがもたらす利益に目を付けた島津藩は、奄美大島、喜界島、徳之島の島民に対してサトウキビの栽培を強制し始めた。サトウキビの強制栽培は島民にとっては過酷な生活を強いることになったが、薩摩藩にとっては有力な財源とな

り、やがて薩摩藩が江戸幕府を打倒する勢力の一員として活躍する要因となった。

明治維新後、薩南諸島は鹿児島県、琉球諸島は沖縄県に属することになったが、やがて、これらの島々は再び歴史の荒波にもまれることになった。第二次世界大戦の末期、アメリカ軍は沖縄諸島に上陸し、日本軍との間で激しい戦闘が繰り広げられた。そして、戦後、北緯30度以南、つまりカラ列島以南の島々はアメリカの軍政下に入った。この状態は、1952年にトカラ列島が、1953年に奄美諸島が、そして琉球諸島が1972年に日本に返還されるまで続いた。薩南諸島が日本に返還されて、1960年代になると日本では高度経済成長の時代を迎えたが、その中心となったのは東京や大阪を中心とする大都市圏であった。薩南諸島の島々では、より豊かな収入をもたらす職を求めて多くの若者が島から出ていったために、過疎化の問題を抱えるようになった。戦後の薩南諸島の歴史は、島の新たな活性化の方策を模索する歴史だったと言ってもよいであろう。

(青山 亨)

課題

台風などの自然条件の厳しさや過疎・高齢化などの社会条件の厳しさをどのように克服するか、これが薩南諸島に住む人達や離島市町村の戦後における最も重要な課題であり、様々な努力が積み重ねられてきた。こうした努力の一つの下支えとなったものが、1953年に制定された離島振興法と1954年に制定された奄美群島振興開発特別措置法である。これらの法制度は、薩南諸島を含む鹿児島島の離島の状態を「本土並みの水準」に引き上げるため、道路・港湾・空港などの交通面や農地・漁港などの産業面、生活環境の向上や教育・福祉の充実に重点的な投資を保証するものであり、今日までの約半世紀の間に果たしてきた役割は極めて大きい。

また、多くの離島を抱える鹿児島県としても、「離島の中の離島」ともいえる特に自然的・社会的条件の厳しい一部の島々を対象に、国の補助の対象にならない小規模な公共事業やきめ細やかなソフト的な施策に県独自の予算で補

助を行ってきている。

これらの結果、まだまだ必要なことは多いものの、薩南諸島の人々の生活は格段に良くなった。大型の旅客船や高速の飛行機が運航できる港湾・空港、一日がかりだった島の中心地への道のりを短時間で結ぶ道路網、温暖な気候を活用した農作物を育む農地、住民の生活や健康の不安を和らげる診療所や福祉施設。島は必ずしも「はるか海の彼方」ではなくなってきている。

しかし、島々の苦悩はいまだに続いている。厳しい自然の前にはまだまだ未整備な交通網。過疎化・高齢化が非常に早いスピードで進行し、地域の活力が失われていく不安。自由競争や規制緩和の流れの中で、海に隔てられているがゆえの産業振興の難しさ。「完結した空間」であるがためにより微妙な開発と自然とのバランス…。社会の急激な変化の前に、薩南諸島の課題はいまだに解決されていないのである。

最近では、離島が積み重ねている様々な努力に対して、人がいなくなっている離島への投資はもう意味がない、無駄遣いなのではないかという議論も都会の側から出

てきている。しかし、一方で、人と自然の共生を考えることが必要不可欠になってきている今、多くの自然や固有の文化が残る離島の奥

深さに心惹かれる都会の人々が着実に増えてきているのも事実である。

島の役割

日本の離島振興法制が半世紀の節目を迎えようとする今日、薩南諸島には難問が山積しているが、これらの島々に果たして「未来」はあるのだろうか。

薩南諸島を含む鹿児島島の離島は、本土から遠く離れた外海に位置するものが多く、どんなに技術革新が進んでも、全ての島々が本土と橋やトンネルで結ばれるようなことはないだろう。そんなときに、国の離島振興の制度が廃止されれば、「もう離島には手間をかける必要はない」ということになる。

しかし、鹿児島島の島々はその程度の重みしかないのか。これだけ豊かな資源に恵まれた島々が存在していること自体が、鹿児島にとって、日本にとって、あるいは世界にとっての大きな財産であるはずだ。離島が国土にとって果たす

べき役割が何なのかもう一度考えてみると、まず、治安・漁業水域・環境の保全など、国土や領海を守り管理する役割が挙げられる。この役割は、島々に人が定住していることにより初めて十分に果たされるものであり、そのためには人々の最低限の生活を確保することが大事なこととなる。また、画一的な社会の中で悩み続けている日本人にとって、島々が多様な自然や文化を保全する役割を担っていることは、今後もっと注目されてよい。離島は、日本人に安らぎを与え、多くの示唆を与えてくれる場所なのである。薩南諸島を含む鹿児島島の島々は、実はこれらの役割を担う条件を十分に満たしているところばかりであろう。

このように島々の価値を見い出してみると、逆に「本土並みの水準」とは何なのかと考えさせられる。社会基盤の整備は、まだまだ足りないところもあるがある程度充実してきているし、所得が本土並み

でなくとも豊かな生活ができる場合もあるから、全てにおいて「本土並み」である必要はないのかもしれない。一方、島への定住対策や輸送コスト対策、廃棄物処理基準への対応の問題など、離島特有の

課題に対する国の措置はまだまだ不十分であり、こうした分野には「本土並みの水準」、あるいは「本土以上の水準」が必要なのではないだろうか。

これからの戦略

過疎化が相当進んでいるとはいえ、まだ全体で20万人程度の人口を有している鹿児島島の島々。その「体力」を用いて活力を取り戻すには、もちろん国全体で離島のことを再評価してもらい、必要な格差是正を図らなければならないが、島々の側からの積極的な戦略、つまり、自分達の個性をどのように島の内外にアピールするかが重要になってくる。

ここで注目すべきことは、島の内と外との連携、すなわち島の住民と都市の人々との親密な交流である。薩南諸島を含む鹿児島島の島々からの出身者（特に奄美群島の出身者）は、大都市を中心に同郷者の組織である「郷友会」を結成し、強いきずなを保っているが、

このような強いネットワークを持っている地域の例は日本では数少ない。今後、こうした都市部での人脈を島々の活性化に結び付ける工夫が必要であるが、さらに、地縁・血縁のみならず、島の応援団でありIターン・Uターンの予備軍ともいえる島々への関心の高い人々も取り込んだ「準島民」のネットワークを拡げ、島民がこれらの外の人々との交流をある程度柔軟に受け入れることが、新たな発想の島おこしの鍵となる。

島々の内と外とを結ぼうとする新たな戦略は、実はすでに始まっている。鹿児島県も、これまで屋久島において環境文化村構想を推進し、2000年（平成12年）には自治体レベルで初の試みとして世界自然遺産会議を開催している。さらに、2001年（平成13年）度からの県総合計画においては、新たな時代潮流も踏まえ、奄美群島の

世界自然遺産への登録を目指した取組みなどを柱とする「奄美群島自然共生プラン」や、都市とのより密接な交流・連携を深める中で島々を再評価しようという「ふれあいアイランドの創造」などの構想

が提案されている。

離島振興法制の半世紀の節目にあたる今日、国においてもこれらの「挑戦」を支援する新たな政策の在り方が検討されるべきではないだろうか。

島人の誇り

島は海に囲まれた限られた空間である。その空間は、実は「持続的発展が可能な社会」の最も典型的なモデルである。この社会を育てていくには、島を愛する気持ち^{しまびと}、島人の「誇り」が必要不可欠である。日本に貢献する島々、本土に引け目を感じない島々、サポーターを広く島外に持つ島々、すべてこれらは「素晴らしい自分達の島をもっとよくしよう、何とか頑張っていこう」という島人の気概から生まれる。21世紀の離島振興は、行政によって準備されたものではなく、島人たちが、自らの創造性と連帯によって、試行錯誤を繰り返しながらも誇り高く進めていくものであろう。

温暖な気候と台風の猛威、島

ごとに異なる豊かな自然と往來を隔てる海、個性を強烈に発揮する文化と都会への憧れ、海の道を通じた人々の遭遇が織りなす歴史と愛憎相まった島への想い……。種子島、屋久島、奄美群島、三島・十島、あるいは本書の対象には入っていない甌島など、薩南諸島を含む鹿児島島の島々には、ある時は悩み、ある時は喜びを感じながら、日々前を向いて暮らしている島人たちがいる。彼らの心には新たな世紀の島人の「誇り」が育っていくのか。以下の章では、薩南諸島の島々をそれぞれ異なった切り口で捉えながら、「誇り」という名の島々の宝を探してみたい。

(植村 哲)